【SS】閻魔の受難な業務

衣玖矢曇

ショートショートの4

閻魔大王は机に肘を付き、A4用紙を眺めていた。
「なんだこれは？天国の連中は何を考えているんだ！？」
A4用紙にはこう印刷されていた。
『被告人（死者）枠の概念上人物への拡大について』
どうやら、小説、アニメ、ゲームの登場人物にも閻魔庁の裁判を受けさせることになったらしい。
通達書を斜め読みしたところ、そう読める。
「おいおい、ただでさえ、現状、閻魔裁判は激務を極めているんだぞ。」
閻魔は、誰もいない裁判長室でぼやく。
閻魔大王の管轄するアジア地区は、そういったサブカルチャーが盛んであるため、閻魔裁判がパンクすることは目に見えていた。
天国に人権派という変な奴らが増えてからこうだ。
この前だって、動物にだって、閻魔裁判を受ける権利があるとか言って、裁判条項を変えさせられた。
案の定、始めてみれば、動物には、罪の意識が無いため、裁判など無理だという結論に達した。
時間の無駄、予算の無駄、そして、何の疑問も持たず奴らの要求をそのまま飲む、極楽庁のキャリア組も同罪だ。
閻魔は、軽く目眩が起きそうだった。
コンコンッ　「失礼します。お茶を持って参りました。」
事務員の鬼がお茶を持って来た。
事務員「どうかされたのですか？お顔色がよろしくありませんが。」
閻魔「現場の声を聞かんのだよ。頭が無能だと、困るのはいつだって手足なのだよ。　はぁ、」
事務員は、不思議そうな顔をする。

今日は、被告人枠が拡大されて、最初の日だ。
閻魔は、法廷の前室で自分に気合を入れる。
「よし、がんばろう！」ドアを開け、法廷へ赴く。
そこには、オーバーオールを着たおっさんがいた。
いつもなら、白装束を着た、青白い顔の被告人がいるはずなのだが。
唖然としていても仕方ないので、早速、閻魔裁判を始めることにした。
何々、閻魔は罪人の情報が載った用紙に目を通す。
閻魔「ふむふむ、外人みたいな名前だな。職業は、えーと、配管工、医者、レースドライバー、冒険家・・・　どんだけ続くんだ。・・・　しかし、すごい経歴だな。　　う〜ん、で、肝心の罪状は、動物虐待？」

閻魔「お前さん、何の動物を殺したんだ？」もはや、浄瑠璃鏡を見るのすら面倒くさい。
オーバーオールの男「きのこです。」男はさらりと答える。
閻魔「きのこね、、、、きのこ？　きのこは動物じゃないだろおおおお！！！」つい大声が出てしまう。
こいつバカにしているのか？
毒きのこを食わせて、殺したというなら、よくわかる、しかし、きのこを虐待して殺したってなんだ？
閻魔を目眩が襲う。
ふと、視線の先の用紙に目を向ける。
死因の欄には、「きのことの正面衝突により死亡」と書かれていた。
閻魔は帰りたくなった。
閻魔は、戒護員の鬼に、退廷させるように言った。
閻魔「被告人は精神鑑定の後、再審する。」

閻魔大王の受難な業務は、まだまだ始まったばかり。